カトリック仙台教区報

2013年11月3日　No.214
発　行
カトリック仙台司教区
〒980-0014
仙台市青葉区本町 1-2-12
Tel(022)222-7371 Fax(022)222-7378
発行責任　広報委員会
URL http://sendai.catholic.jp/

第41回　カトリック福島県の集い
「信仰年を生きる福島の私たち～大震災から復興支援へ～」

「キリストを芯柱にして生きる」
講演・長谷川　潤　神父（フランシスコ会管区長）

2013年9月16日（月・敬老の日）、カトリックいわき教会で第41回福島県カトリックの集いが開催された。この日は台風18号がいわきを直撃するということで、開催が危ぶまれたが、県内各地からおよそ160名が参加した。

常磐線に乗ると、上野を出てすぐスカイツリーが見えます。634mあります。日本のような地震の多い国で、倒れない安全なものを造るためのヒントを得たのが、法隆寺の五重塔でした。五重塔は、下から上まで1本の芯柱が立てられているからだということです。

私たちカトリック者にとって、この芯柱は、「信仰とは何か」ということの「信仰の中味」です。波風があっても倒れない芯柱を私たちの内にもつことです。それは、生きているキリストです。このキリストによって、私たちは日々新しくされ、成長します。

イエスが生きていた時代の人々が生活の規範としていたのは律法でした。

それに対してキリストは、私たちは規則の奴隷ではない、と言ったのです。ですから、キリストはこの律法に徹底的に反対しました。キリストに従う人々は、律法を芯柱にしたのではなく、生きているキリストを芯柱にしました。ですから、律法を守ることを中心にしたのではなく、キリストに生かされていることを中心にしました。

信仰は、何を信じるかではなく、私が生きる中心にしているキリストを、自分の生活の中で、どのように生かすかということです。

これが、信仰を生きることです。

1．キリストは何を私たちに語ったのか。（ルカによる福音6・27－38朗読）

このみことばを聞くたびに、「そんなこと言ったって、無理だよ」と思います。「悪口を言う者に祝福を与える…」。私なら、10倍返しだ、と思うかもしれません。

なぜ難しいかを伝えてくれる一つの話があります。

インドの北部に、ダラムサラ（聖霊の土地）というところがあります。ダライラマの亡命政府が置かれています。

ここに、「ダライラマ　チベット子ども村」という施設があります。何千人かの子どもたちがいるのですが、その多くは、中国に追われ、高い山を越えて逃げてきた子どもたちです。両親を失った子もいます。

そこを訪れた、日本人の映画監督さんから聞いた話です。

お正月には、特別なプレゼントが子どもたちに配られます。配っている最中に、一人の小さな男の子が、大きな叫び声をあげました。もらったプレゼントの中に、大きい男の子がほしいものがあったのです。大きい男の子は、そのプレゼントを奪ったのです。

その叫び声を聞いた校長先生（お坊さん）が飛んできました。そこで何をしたか、というと、私なら取った子の頭に一つげんこつをしたことでしょう。そのお坊さんは小さな子を抱き留め、頬ずりして、全身全霊をこめてその子に愛情を示しました。そうすると、その子の怒りや悲しみがおだやかになっていきました。

小さい子の気持ちをお坊さんが受け止めた。その子に愛情を注ぐことによって、もっと大きな愛、仏の慈悲に触れたのです。

引用したルカ福音書の最後に、「あなたの父が憐れみ深いように、あなたも憐れみ深い者となりなさい」とイエスがおっしゃっています。このイエスが、「敵を愛しなさい」と言われる。私にそんなことは無理だ、と思うのは、私の中に神の大きな慈悲に触れていない自分があるからです。奪った男の子は、自分の行動に恥ずかしさを感じ、小さい子に奪ったものを返したそうです。

生命の泉

地区割り構想がいよいよ現実味を帯びてきた。教区外からの支援に駆けつけてくださっている司祭によって急場をしのいできたが、今のうちに教区付、教区在住の司祭たちで司牧に支障が出ないようにしなければならない▼そのために信徒がもつ司祭中心の教会生活の固執観念を取り除かなければならない。維持費を出して日曜のミサにあずかれば、あとは教会委員が司祭に協力して円滑に運営できると考えてきた。しかしそれでは全く不十分だ。司祭中心の構図が崩れればこれまで発言しなかった信徒も自由にアイデアを出し合うことになり、遠慮のない議論の場になりかねない▼葬儀のように外部の業者に協力してもらう場合金銭が絡むとき信徒同士に亀裂が入る事態も出てくる可能性もある▼日本の教会は戦後に海外からお金と人が来てできた。私たちの維持費以上に立派な教会は当たり前になった。また、新しい問題として維持費が個人情報として秘密が守られるかということもある▼司祭不在の教会の不安を解消するためには教義を生活に生かす正しい理解が現状では十分でない。研修会で聞く話は深く専門的ではあっても「お話」だ。理解することは必要だが、日常の生活に信仰を実践的に生かす工夫をしなければならない▼ミサの出席率が3分の1程度では、信仰生活とは「罪を犯さないようにすること」と「ミサにあずかること」に要約されていたと思っている人は多いのではないか。これでは「善いサマリア人」の中の祭司やレビ人とおなじだ。かかわりを避けた信仰生活は他人のためどころか自分のためにもならない。教会が祈りと安らぎの場となるためにお互いに足を引っ張らずに忍耐強い組織づくりをしていかなければならない。教会は「柔和な人」が「受け継ぐ」信仰に成熟していく実践の場だ。（守）

これは、仏の慈悲でした。それによって、大きい男の子も回心し、小さい子も大きな愛を知りました。

敵を愛する心ということは、敵をも愛している神の憐れみに、触れるということです。私たちの力で敵を愛することはできません。しかし、神の慈しみに触れるなら、少しずつ変えられます。この憐れみの心は、最後の晩餐の後で、イエスが父に祈られた祈りによく表れています。

「わたしは、もはや世にはいません。彼らは世に残りますが、わたしはみもとに参ります。聖なる父よ、わたしに与えてくださった御名によって彼らを守ってください。わたしたちのように、彼らも一つとなるためです」（ヨハネ17・11）。

イエスは、あなたが私の内にいて、私があなたの内にいる、とおっしゃいます。自分が誰かの内にいるということを感じたことがあるでしょうか。その人を愛したら、その人が私の内に生きています。

交わりの心を、憐れみの中に置かれました。それが愛です。父と子と聖霊が一つであるように、私を信じている人がそういう心になるように―それが、イエスが伝えた愛です。

2．なぜ、イエスはそのような交わりの愛を強調なさるのでしょうか。

神のいのちとは何でしょうか。

創世記のはじめに、人間がどのようにして造られたかを、当時の人の自然観をもって書いています。

神から造られた人間は、生きるものとなりました。その人間のそばに、いろいろな動物を神は連れていかれました。しかし、人の心を慰めるものはありませんでした。助け手にはなりませんでした。そこで、もう一人の人間、女性を神は造られました。その人を連れて行ったとき、「これこそ私の骨の骨、私の肉の肉」と言い、助け手となりました。その交わりで、人は人間となっていきました。

交わりは、人間になっていくことです。創世記は次の章で、交わりが壊されたことを書いています。それを指摘されたとき、男は「あなたが私に与えてくださったその人が、私をそそのかしたのです」と言います。これは、分裂を表しています。人間が、人間であることから、むしろ、互いに憎しみ合うことが始まったのです。

ヨハネ福音書では、復活されたイエスが初めて弟子たちに表れたとき、創造主が創造のときになさった同じ動作をなさっています。

「弟子たちに息を吹きかけて言われた。あなた方がゆるせば、その罪はゆるされ、あなた方がゆるさなければ、その罪はそのまま残る」（ヨハネ20・22－23）。つまり、新しい交わり、かかわりを生きるように、派遣するということです。

イエスの伝えようとした命は、交わりの命であり、この交わりによってのみ、人は人となり、人間として成長するのです。このことを、私たちの芯柱とするようにというのが、キリストの強い望みです。

3．キリストの望みに対して、生活の中で何を実行したらよいのか。

ヨハネ・パウロ2世が、2000年の聖年に出された手紙の中で、交わりの霊性について強調なさっています。この愛の交わりの霊性は、兄弟のために空間を与えるということです。

私は、この空間という言葉を、特に、地震、津波、原発の事故という東日本大震災のとき、特別に思ったことを覚えています。

地震、津波、原発の出来事は、人が住めない空間をつくりました。ある空間から人を排除してしまいました。その地に人々は生活し、交わり、生きていました。苦しみがあったとしても、その人たちにとっては、ふるさと・楽園でした。そこから人々を追放したのです。

今、この空間をもう一度、新しい人が交わる場所、動物も家畜も共に生きるように、命がけで、何千人の人が除染作業を行っています。後片付けをしています。それは、単に、物理的なことではなく、キリストの信仰の中で、交わりという視点の中で、空間を考えたいと思います。

イエスは弟子におっしゃいました。「私の家には住むところがたくさんある」と。神の空間は、すべての人を抱きこむものです。

私の中には、どれほどの空間、スペースがあるのでしょうか。交わりの中に、どれほどの人を、私の中に入れることができるかということです。交わりの愛は、その人を私の中に住めるようにする空間です。

私たちが交わりを生きることにより、私が私となっていくのです。

今、まさに、この地・福島で、空間を外にも私の内にも創っていますが、それが創造のわざです。

平賀司教様は、「私たちは、神のよき業のために創られたのです」とお話になられました。私たちは教会、家庭、職場、地域社会において、プレゼントとして入っていくのでしょうか。また、その人をプレゼントとして受肉させていきますが、これが、今、日本の教会に誠実に求められているのです。そのように望んでおられるキリストを、私の中心、芯柱として持っていたらよいと思います。

地区制ということ（4）

司教　平賀徹夫

去る9月23日の仙台教区宣教司牧評議会で表明された県代表評議員による各地域からの意見はとても参考になりました。地区の設定で、「県境をまたいで」ということには心理的な抵抗感ないし懸念といったものが複数の意見に表れました。それでも、そういう設定となるのであればやむを得ないとの意見も出ましたが、長年馴染んできた「県連絡協議会」や「県大会」という県単位のつながりを大事にしたいという思いが勝っているかな、と思います。

これからもできるだけ多くの意見を聞き、どのようなグループ分けが良いかを考えることとします。

この宣教司牧評議会に先立って8月26日～27日に教区の司祭集会が行われ、そこでの話し合いで、「司祭間で、司祭と信徒間で、教会と事業所間でコミュニケーションをどうとるかが大事だ」という意見が出されたのでしたが、この宣教司牧評議会でも複数の代表信徒から「地区制をとって進むには、司祭同士が良いコミュニケーションをとれることが欠かせない」という意見も複数表明されていました。

上記、司祭の集いと宣教司牧評議会を経て、①各地区に複数の司祭を派遣すること。②地区全体が宣教司牧の現場であって、どの小教区をも偏りなく世話をするように司祭同士話し合い、地区内の信徒（および修道者）ともよく話し合って協力を仰ぐようにすること。③主日にはできるだけ多くの小教区でミサがあるようにすること。④教会と社会との接点である地区内の教会関係事業所との関わりを心掛けること。⑤外国籍の信徒との関わりをいつも意識すること、等が現在、地区制に向けて固まっている考え方です。

2011年から2012年の「仙台教区大会」では、「私たちは主において一つ」を目指し、「スタンプラリー」で教区内小教区を訪問し、主日ミサでは全小教区を意識して祈り合う貴重な実践を行い、各県の集会あるいは大会には互いに押しかけていって盛り上げたのでした。「主において一つ」は、これから設定される「地区」でのつながりから始まるのだろうと思います。

「地区制」は、歩みながら考えよう

仙台教区宣教司牧評議会定例会

9月23日(月・秋分の日)、午前10時から午後4時まで、教区本部で開催された。

開会に当たり、平賀司教は「今回の定例会で、教区の在り方を見直す『地区制』について、各県連で集約したご意見を十分検討していただきたい。小教区のグループが、力を合わせていくことができるよう、互いに忌憚のない意見を出してほしい」と挨拶した。

教区事務局長小松史朗師を議長に、議事が進行された。

第1議題　地区制について

各県の信徒、司祭の代表からそれぞれ意見が出された。

◇実際に動き出さなければどのような問題があるかわからない。歩みながら考えていくしかないのではないかという意見が多かった。

◇地区ごとによく話し合い、信徒同士の相互理解や協力体制を作っていくことが必要である。

◇地区担当の司祭同士のコミュニケーションと積極的な協力が大切である。

◇地区制を推進することで、信徒の意識が変わり、教会運営に積極的に関わっていこうとする姿勢が高まるというメリットがある。など、地区制の良さを見出し、積極的に推進していこうとの意見が多く見られた。

◇教会管理運営、経費負担、典礼の進め方、葬儀の進め方などに関して、教区として統一したマニュアルがほしい。

◇教会同士の距離が離れていて、車で1時間以上離れている所では、困難なことが多い。

◇地区制について理解が進んでいない教会もある。などの問題点も挙げられた。

各小教区の独自性を保ちながら、地区内の教会同士が有機的に連携していけるかは、互いに知恵を出し合い、前向きに進めていくことで、新たな仙台教区に生まれ変わることが期待される。

「地区の小教区同士の結びつき、担当司祭と信徒、修道者が協力によって教会の使命を果たして行くことが大切。そのためには、互いに尊重し合ってよく話し合うことが求められる」と、平賀司教から説明があった。

さらに、司教の提案にある①「地区内の教会の有機的な関わり」、②「共同宣教司牧ではない」③「複数の司祭で地区を担当する」という3点について説明してほしいとの質問が出された。

①有機的関わりとは、複数の小教区が互いに結びついて教会の使命を果たして行くことを意味するのではないかとの説明があった。これを受けて平賀司教は、司祭が複数の教会を受け持つことで、他の小教区と結びつくことができる。教区の中の教会が互いに関わりあっていくことが大事です。また教会憲章4章32～37を示して、信徒は、教会のことは司祭に任せておけばいいという考えではなく、互いに認め合い、尊重し合って教会の使命を果たして行くことが求められていると説明した。

②「共同宣教司牧を目指すのではない」というのは、地区担当の複数の司祭が共住することを目指すのではないということ。現在仙台中央地区では、司祭が元寺小路教会に共住して「共同宣教司牧」を行っているが、これを各地区に当てはめる事には無理がある。

③「担当司祭」については、派遣された複数の司祭は、どちらも主任司祭の権限を持つことになる。ただし、新司祭については、2年くらい助任とした方が良いと思う。

今後の動きとして、1月には新たな地区割りを発表。2月末頃に司祭派遣の発表。3月の宣教司牧協議会で具体的な方向性を検討。4月導入となる。以後、必要に応じて見直しが必要になってくることも考えられる。

第2議題　施設設備協力制度要綱の改定について

第21条と第22条を、改定し、「今まで、教会の改修工事の資金援助や融資に、その教会が納めていた金額の全額を受け取ることができたが、20％になる」14年4月以降は、80％になる」とした。

20％は、この事業の財源として残される。

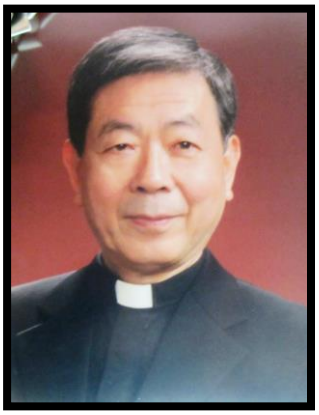
また、今まで教区から拠出されていた300万円は、中止された。

その後、ワールドユースデイ参加報告、人権を考える委員会、仙台教区サポートセンター、広報委員会などから報告があり、閉会した。

司教日程　11月・12月

11・1㊎ 上智大学創立100周年
2㊏ 喜多方教会50周年
3～4 部落差別人権委・全国会議
5㊋ 司祭評定例会・教区司祭団・役
6㊌ 部落差別人権委・事務局会議
7㊍ 社会司教案委員会
8㊎ 子どもと女性の権利擁護デスク
9㊏ 典礼憲章発布50周年
10㊐ 石巻教会堅信式
11～14 日韓司教交流会
15㊎ 郡山ザベリオ学園80周年
16㊏ スペルマン病院・追悼ミサ
17㊐ いわき教会
22㊎ 第27回仙台教区サポート会議
23㊏ 福島県連協
24㊐ 信仰年閉年
30㊏ 松木町教会・
12・1㊐ 松木町教会
2～3 仙台教区・司祭の集い
9㊊ ウルスラ会本部修道院
一本杉教会 落成式
10㊋ 司祭評役員会・教区司祭団・役
13㊎ 部落差別人権委・定例会
15㊐ 仙台天使園80周年
16㊊ 福島ブロック会議(野田町教会)
17～19 司教の社会問題研修会
25㊌ 主の降誕

フランシスコ・ザビエル 梅津 明生 神父 帰天



梅津明生神父は、２０１３年８月28日、光ケ丘スペルマン病院にて帰天。８月30日、通夜、31日葬儀ミサ・告別式が元寺小路教会で行われた。

優しい人柄で、多くの人に慕われた師の葬儀には、大勢の信徒が参列した。

【略　歴】

１９４１年２月14日　函館に生まれる
１９６９年７月５日　司祭叙階
１９７０年～元寺小路教会助任司祭
１９７２年～　野辺地教会主任司祭
１９７６年～　角田教会主任司祭
１９７７年～　築館教会主任司祭
１９８６年～　一関教会主任司祭
１９８７年～　司教総代理
１９９４年～　仙台中央地区モデラトール
１９９５年～　療養休暇
１９９６年～　北上教会主任司祭
１９９８～２０００　水沢教会主任司祭兼任
２００１年～　盛岡地区モデラトール
２００４年～　教区会計
２００６年～　盛岡地区協力司祭
２００７～２００９　教区会計代行兼任
２００９年～司教総代理
２００９～２０１０　仙台中央地区協力司祭兼任
２０１１～２０１２　原町教会協力司祭兼任
２０１２年～　郡山教会主任司祭
二本松教会主任司祭代行兼任
２０１３年８月28日　帰天（72歳）
社会福祉法人カトリック児童福祉会理事長
野辺地カトリック幼稚園園長・角田カトリック幼稚園園長・愛心幼稚園園長・築館聖マリア幼稚園園長・大河原カトリック幼稚園園長・小さき花幼稚園園長・暁の星幼稚園園長・石巻カトリック幼稚園園長補佐　等を歴任

梅津 明生神父様を偲んで「郡山教会 貸し出し文庫」

元寺小路教会　工藤 正子

去る３月18日夜、梅津神父様から電話があり「４月から司祭の家に移るので、荷物を運んでほしい」とのこと、26日と29日の両日、Ｓ君とレンタカーを借りて荷物を運びました。

29日、荷物を積み終えた時、私たちを郡山教会聖堂の後ろに置かれているお手製の大きな本棚の所に連れて行き、中の本を大、中、小に整えながら、ご自分が今まで読み終えた本との別れと、これからこの本と出会う人を思い、楽しみにしているような様子でした。

先日、郡山教会巡礼の際、あの本棚を前にして、一瞬、神父様と出会ったように思ったのは、気のせいでしょうか。

この貸し出し文庫の前にたたずむ時、「よく来てくれましたね!!」と、優しい神父様のお声が、訪れる人々の心の中に響き、大きな慰めをあたえてくださるのではないかと信じています。

インターナショナルミサ

９月22日（世界難民移住移動者の日）元寺小路教会でインターナショナルミサが行われた。入祭の行列では自国の民族衣装を着た子どもたちが、ローソクの光を持ち、祭壇脇に飾られた地球儀の周りに置き、世界の平和を願った（写真）。

説教で森田直樹神父は「皮膚の色や目の色、髪の色が違っていても、一つの信仰を告白する私たちは皆、神の愛に包まれている。

神の愛は、親の愛である。我が子を忘れる親がいるだろうか。いつも心に留め、見守ってくれる。

周りの人を受け入れ、一人ひとりが大切にされる世が来ますように」と話した。

アンダー・コントロール

オリンピック２０２０年東京開催が決まった。

安倍首相は、最終プレゼンで、「福島の状況は確実にコントロールされている」と胸を張った。

約 300ｔの汚染水が海に流出。地下水 400ｔ/日が原発の下を流れている。加えて、台風１８号で溜まった低濃度汚染水 1130ｔが海に放出された。地元漁民は、これから最盛期をむかえるシラス漁が出来なくなったと嘆く。

福島第１原発の敷地に林立する汚染水の貯蔵タンク。政府が乗り出して、莫大な資金を投入するというが、汚染水問題は果たして解決できるのか?

不測の事態に対して、人間の力でコントロールできない原子力に頼って、豊かさを求める人間の傲慢さを恥じて謙虚で、清楚な生き方を求めたい。

原発に頼らず、限られたエネルギーをどう使うかを考え直すことが一番大事ではないか。

オリンピック・パラリンピックの東京開催で、夢を膨らませている子どもたち、海外から参加するアスリートのためにも、安心して競技に全力を注ぐことができる日本にすることが、本当の「お・も・て・な・し」ではないか。　　地球を大事にする会　岩井　誠

訃報

スール・アンジェラ四戸ミツ

９月24日　老衰のため帰天（89歳）

１９２４年11月20日　生まれ
１９４８年12月７日　受洗
１９５０年８月15日　聖ウルスラ会函館修道院に入会
１９５４年４月30日　初誓願
１９５７年４月30日　終生誓願
修道生活59年

伊豆下田の修道院創立者の一人であり、当初から長年宣教にたずさわり、その後、八戸聖ウルスラ学院事務職として勤務。

演劇とユーモアの特技で共同体のレクリエーションなどで皆をよく楽しませてくれた。

仙台教区「新しい創造」…第３期の取り組み

笑顔でつながり続けて2年余
松木町教会「愛の支援グループ」

「共同体が一つになって」

大震災直後から松木町教会「愛の支援グループ」として、相馬市での流出物写真洗浄、福島市内の「あづま総合体育館」第一避難所への物資の支援、炊き出し手伝い、心のケアふれあい茶の湯による「もてなしの傾聴」ボランティアなど、気付いたことから活動を始めました。

避難所の閉鎖に伴い９月からは、相馬市大野台仮設へ「もてなしの傾聴」ボランティアに行き始めました。現在も支援を続けている福島市宮代仮設には、福島原発事故でふる里を追われ避難生活を強いられている浪江町の方々が住んでいます。宮代仮設へ支援を続けて９月30日で２年になりました。

これもカリタスジャパン、CTVCのご支援と全国からのボランティアさんが寄り添い続けて下さっているおかげです。そして、教会一人ひとりのお祈りのおかげです。

今年の４月からは、福島市野田町教会の方々とご一緒に活動しています。このことは、神様がお望みになっておられたことでしょう。共同体が心ひとつになって支援活動ができることは大きな喜びであり、お恵みです。月平均２回の茶の湯をベースとした笑顔を届けるだけの支援活動に９月現在でボランティア参加延数１，６６７名となりました。心から感謝いたします。

宮代仮設には子どもが一人も住んでいないこともあって子どもや学生などはとても喜ばれています。今回は、この２年間の「気づき」と「神様からの贈り物」に感謝を込めて、その一部をご紹介いたしましょう。

「仮設住民と一緒に企画と準備」

ボランティア出発前には、オリエンテーションの後「小さなひとびとの」を歌い、「東日本大震災被災者のための祈り」を唱え、司祭から派遣の祝福をいただいて宮代仮設へと向かいます。宮代仮設へ着くと住民と一緒に準備。作業中も大切なふれあいのときとなっています。全員でよく歌も歌います。「ごらんよ空の鳥」「花は咲く」「いつでも夢を」など。そして、カラオケも。

イベントの最後には、ボランティアさんの分かち合いがあり気づきと様々な感動のドラマがあります。

「３・11以前の年中行事に近いイベントによる〝心の自立〟支援を」

今年の５月「心の復興を」として企画された初めてのふれあいバザーには、地域の方々や宮代以外のところに避難されている方々、子どもたちなど予想以上の参加がありました。県外、県内の教会からの温かい協賛品もあり、何よりも仮設の方々が心一つとなった働きでした。

仮設のおばあちゃん方の甘味噌の田楽もあり、様々な手芸品の発表の場となった展示コーナーもありました。また、今年の夏まつりでは仮設の皆さんが仮装に熱の入った盆踊りとなり、「よがったで賞」「たのしがったで賞」「がんばったで賞」「たまげたで賞」「かわいいで賞」に拍手が沸きました。

９月14日の敬老会には、敬老者（80歳以上）の方々が、長寿の秘訣を「前向きに生きることです！」「趣味を楽しむことです！」と笑顔で話されていたことには感激いたしました。高齢者の自立は、「心の自立」と気づかされました。敬老者がマンボダンス、舞踊、民謡などをご披露され、私たちがパワーを頂いた次第でした。

「寄り添い続けること」

前向きに心をしっかり持たなければ、へし折れてしまう、だから元気っぽくなっているのかも知れません。

放射能の被災者と言える福島市民の私たちも県外のボランティアさんに元気づけられています。そして、支援活動を続けていることによって互いに支え合い元気をいただいています。

「元気になってきたからもう大丈夫。」ではないと思います。浪江町は、原発事故のため、今でもあの日から「とき」が止まったままです。ふる里に家も全て残したまま何をなすすべもなく２年半も経ち、荒れ果てた家はもう住める状態ではありません。

「ふる里に帰りたいが帰れない」「帰らない」この苦しみの、心の空間に愛の寄り添いを続けることが大切でしょう。これからも、共に歩んでいけるよう祈っています。

「今日も元気、きっと明日も元気、いつも笑顔でいられますように」と。（代表　鈴木キミ子）

就任司祭の自己紹介

はじめまして、私はベトナム出身の教区司祭マイケル神父です。大家族に生まれ育ちました。１９７９年６月20日生まれです。７年間フィリピンへ派遣され、神学校で勉強していました。神学校を卒業した後、２０１０年６月３日助祭に叙階され、その半年後、12月14日（十字架の聖ヨハネの祝日）に司祭に叙階されました。

それから宣教師として那覇教区のために遣わされました。沖縄に着任して以来２年５ヶ月になります。今、私は安里教会の助任司祭として働いています。

この10月から宮古教会へ派遣されて、私は本当に嬉しいです。皆さんと共に神様に賛美と感謝を捧げることは、私にとってありがたいことだからです。次のように記されています。「見よ、兄弟姉妹が共に座り、何と言う喜び、何と言う恵みでしょう！」と。（詩編133・１）感謝と祈りのうちに。

2教会で設立50周年を祝う

古川教会

9月1日（日）、古川教会で献堂50周年記念ミサが、平賀徹夫司教の司式のもと、川井啓師、川崎忠紀師、土井勝吾師の参加を得て、盛大に挙行された。

県北の石巻・築館教会のみならず、東仙台教会、東京教区本所教会の信徒も参加し、70人を越える信徒や関係者で聖堂がいっぱいになった。

平賀徹夫司教の説教は、聖書の言葉を引きながら献堂の意義を参加者に優しく包み込むように教え諭し、信徒等に深い感銘を与えた。

古川教会の歴史をみると、1957(昭32)年10月に古川市上法橋川原に民家を借りて建てた仮聖堂が前身である。求道者が増え、仮聖堂が手狭になったことから、かねて準備していた現在地に故小林有方司教の独自の設計にもとづいて建設され、1963(昭38)年9月14日に献堂式が行われている。

当時の教会は、現在の古川東町カトリック保育園の位置にあり、中央が聖堂、東翼が集会室、西翼が司祭館になっており、真上からみると十字架の形に設計されていた。祭壇は公会議の精神に則り、仙台教区では最初の対面式の祭壇とされた。

献堂50周年記念ミサ後の祝賀会は、手作りとおもてなしの心をモットーに、会場を動かさず古川教会内の集会室で行われた。信徒持ち寄りの手作り料理がテーブル狭しと並べられ、平賀徹夫司教の挨拶、祈りの花束の贈呈、年輪を意味するバウムクーヘンのケーキカットと続き、石巻教会大野隆教会委員長の乾杯の音頭を皮切りに賑やかな祝宴となった。

古川教会の信徒は、今後、自らが宣教司牧の主体であるという平賀徹夫司教のお教えを胸に、日々の生活の中で活動して行くことになる。

（古川教会 橋本 改）

盛岡上堂教会

守護の天使と共に

10月2日(水)、盛岡上堂教会は、献堂50周年記念ミサ・祝賀会を行いました。

当教会は、1963年9月に献堂式が行われました。それまでは、松尾銅山の職員アパートを借りた松尾(元山)教会(1952年)に始まり、1959年に設立した屋敷台教会がありましたが、松尾銅山の閉山により、信徒が激減したため、屋敷台教会を引き払い、上堂教会が設立されることになりました。教会設立の資金面ではベトレヘム会に大変お世話になっています。

教会名は、当初厨川（くりやがわ）教会でしたが、1975年に盛岡上堂教会に改称されました。

50周年記念事業については、3年程度前から、検討し始め、記念誌、施設整備には一昨年より取り掛かり準備を進めてきました。

記念ミサは、平賀司教の主司式により6名の司祭により行われました。参加者は、92名でしたので、小さな聖堂から玄関の間や事務室まで多くの人があふれました。

聖歌の響きは、聖堂を揺るがすほどでした。

ミサの後、体調を崩し祝賀会に出られないツゲル神父に花束が贈られました。

祝賀会は、盛岡駅構内のホテルで行われ、36名が参加しました。平賀司教の祝辞を戴き、会食。各教会代表のスピーチ、最後には、民謡と踊りが飛び出し。ミゲル神父の上手な手ほどきで、みんなが立ち上がり、にぎやかな踊りの輪ができました＝写真＝。参加くださいました方々に心から御礼申し上げます。（盛岡上堂教会 田畑健司）

JCMA仙台支部交流会 宮古で開催

日本カトリック医師会（JCMA）仙台支部の交流会と総会が7月6日～7日、宮古市で開催された。宮城県から鷹觜指導司祭他7名、岩手県から4名、計12名が参加。

津波被災地を訪れることで、今後も関わってゆくきっかけにしたいとの願いから、宮古市在住の岩間充（みつる）先生ご夫妻の多大なご協力を得て、宮古市での開催が実現した。6日夜の懇親会は田老地区にあるグリーンピア三陸みやこ（施設内には仮設診療所と薬局が設置され、敷地内の一角には仮設住宅が連なっている）を会場とし、カトリック宮古教会主任司祭代行のボスコ師をお招きして開催した。我妻先生と岩間先生によるフルートとギターの合奏、ボスコ師によるベトナム語の主の祈りの歌、山浦先生によるケセン語の主の祈りの歌に続き、鷹觜神父も歌を披露され、心温まる時間を過ごした。

翌7日には宮古教会聖堂でのミサの後、山浦玄嗣先生による「新しい風に新しい福音を」と題した記念講演が行われた。宮古教会の信徒の方々を中心に、近隣に住んでいる方など37名ほどが参加され、熱心に耳を傾けた。

また新刊書の『ナツェラットの男』（ぶねうま舎）の内容にも触れ、聖書を通して、私たちが生活の中でイエスの姿を身近に感じ、生き生きとしたイエスとの交わりを実現することができるならば、教会は元気を取り戻すことができる、と話された。

このたびの交流会開催にご協力くださった宮古教会の皆様に心から感謝いたします。

（JCMA仙台支部　溝口由美子）

元寺小路教会にパイプオルガン設置

10月19日(土)午後2時から平賀司教司式で祝福式、記念コンサートを実施。

イェーガー＆ブロンマー社（ドイツ）製

被災地に生きる外国籍住民に寄り添う

日本カトリック難民移住移動者委員会全国研修

日本カトリック難民移住移動者委員会全国研修が、元寺小路教会で10月16～18日に行われ各地から40名程の参加がありました。テーマは「わたしたちは、これから…3.11を今も生きる被災地の外国人」で、16日は元寺小路教会所属、東北大学の李善姫（イ・ソンヒ）さんの『東北大震災における被災外国籍住民の現状と支援の課題』という基調講演があり、次に「被災地の声を聞く」という発表は、仙台教区滞日外国人支援センターのハルノコー神父様と大船渡教会所属の「パガサ・イワテ」代表の菅原マリフェさんのお話を聞きました。

17日は①石巻・南三陸②気仙沼・大船渡③福島・原町・南相馬の3コースに分かれて被災地の視察、現地の外国人の体験談を聞きに行きました。私が参加した②コースでは屋台村で海の幸を堪能した後、大船渡教会で被災した外国籍の方が10名以上来てくださり、一人ずつのお話を聞きました。震災時の様子、仮設での苦しい生活など…その中でも彼女たちから仲間がいたから乗り越えられた、希望、という言葉が聞かれたのが印象的でした。

18日は前日に行った各コースの写真を見ながら説明を聞き、その後、グループに分かれて分かち合い、最後はミサで締めくくられました。平賀司教は説教で「一人一人が宣教者！と言われ、特に外国から日本に来られ、辛い経験も一緒に体験し、共に生きている方々と私たちも寄り添い歩んでいくことが大事だ」と話されました。

「最も困難な時に私たちは1つになった」マリフェさんの言葉（林）

教区研修会始まる

今年度の教区研修会は、「ミサとは？」講師＝森田直樹師、「典礼音楽」講師＝新垣壬敏（つぐとし）氏、の二本立てで各県連主催で行われることになった。

9月16日(月・敬老の日)、先陣を切って「ミサとは？」をテーマに、岩手県中ブロック（上堂・志家・釜石・遠野・花巻各教会）の研修会が花巻教会で開催され38名が参加した。

＝教区研修会の開催日程＝

【青森県】「ミサ」10月20日、塩町教会・10月26日、弘前教会「音楽」9月29日 塩町教会

【岩手県】「ミサ」10月9日、四ツ家教会、11月4日、一関教会「音楽」1月26日、四ツ家教会

【宮城県】「ミサ」11月23日、元寺小路教会「音楽」2月11日、元寺小路教会

【福島県】「ミサ」10月14日、郡山教会「音楽」11月4日、郡山教会

研修会の内容については、次号に掲載する予定。

第3回仙台ロゴス講座

「カトリック信仰の魅力」を語る

仙台ロゴス研究所では、9月28日(土)、午後、北仙台教会信徒館で第3回のロゴス講座を開催した。2013年度のメインテーマは、「カトリック信仰の魅力」講師は、岩田 靖夫氏＝写真＝。仙台白百合女子大学名誉教授文化功労者（元寺小路教会所属）

演題は、テーマに沿い、

― 私見「神の国」―

以下は講話の要旨。

①神とは愛、善意そのもの。

それを信じる、ということが、信仰ということ。だから、神の国とは愛の国。万人が憎しみなく、怒りなく、愛し合って生きる国。

②全存在者は神から生まれたもの。

だから、なんらかの神を宿している。全存在者は、神から生まれ、神へと帰る。帰るということは「神と一つになる」ということ、すなわち、「救われる」ということ。

③神の国は、すでに来ている。

全存在者が神からの誕生として創造されたとき、それは、すでに、神の国の成立である。神の国は歴史の中で生成発展してゆく。永遠に。なぜなら、神は無限であり、静止なき活動そのものであるから、神の国も永遠の活動そのものとして、進化展開するであろう。しかし、われわれはその内容を理解しているわけではない。

では、なぜ、この世に、悪と苦しみがあるか。

④宇宙が秩序であるということ。

万物は物理法則に従って必然のプロセスを辿って展開している。宇宙の生成と進化は火炎地獄のプロセス。爆発と収縮の繰り返し、これに人間が偶然遭遇すれば、それが大災害。どうしてある人が災害に会って、ある人は会わないのか、その理由は誰にも、ローマ教皇にも分らない。

⑤人間が、神と同じく、自由意志である、ということ。

この自由の根源には、善も悪も選べる、という恐ろしい可能性があり、神はこの可能性の上に、人間の愛を求めたということ。なぜなら、愛は自由の上にのみ成立するからである。人間が自由でなければ、（互いに愛し合う）という創造の意味が失われる。

告知板

◆第21回ロゴス公開講座◆

仙台ロゴス研究所再開10周年記念
日時・11月17日(日)13：30～
会場・北仙台教会信徒館
テーマ「ロゴス(みことば)を歩む」
―霊の火と共に―
講師・宮本 久雄 神父
（ドミニコ会地区長、上智大学教授）
参加費・無料
問合せ・岡田 謙一
携帯＝090－2360－1408

◆水沢キリシタン祭◆

日時・11月10日(日)14：00～15：00
会場・カトリック水沢教会
問合せ・高橋昌神父 Tel：0197-25-7707
水沢は、キリシタン領主、後藤寿庵の領地、福者ペトロ岐部神父が捕えられた所。さらに、福者カルワリオ神父他、8名が水沢の銀山で捕えられ、仙台の広瀬川で殉教。他、15件、160名程が殉教している。この殉教者を讃える。

◆伊達正宗の夢―慶長遣欧使節と南蛮文化◆

仙台市博物館 ～11月17日㈰まで＊後藤寿庵が筆頭署名し、教皇に送った「奉答書」展示。

復興支援・特定非営利活動法人（ＮＰＯ法人）会員募集

東日本大震災の復興支援のために活動している釜石ベースと福島やさい畑～復興プロジェクトが、それぞれ「特定非営利活動法人」の認証を受け活動を推進しています。この活動目的に賛同し協力していただける個人及び団体お方(会員)を募集しています。詳しくは、お問い合わせ先へご連絡ください。

ＮＰＯ法人福島やさい畑 ～復興プロジェクト～

【趣旨（目的）】

特定非営利活動法人　福島やさい畑～復興プロジェクト～は、原発事故による風評被害を受けている原発被災地「ふる里福島」の農家の作物について、放射能測定検査の充実を図り、全国の消費者に安全性を訴えて購入を願う活動を行うとともに、日本の農業問題について再考し「農業県福島」の復興を目的とする。

【会員の種類】・正会員：法人の目的に賛同し、入会した個人及び団体(福島で開催される総会での議決権があります)**・賛助会員**：法人の目的に賛同し、賛助の意志を持つ個人及び団体(賛助会員は財政的にご支援頂ける方で総会での議決権は、ありません。)

年会費や会員入会方法につきましては、下記までお問い合わせください。

【お問い合わせ先】

特定非営利活動法人福島やさい畑～復興プロジェクト～事務局
〒964-0906　福島県二本松市若宮 1-361
電話/FAX　0243-23-3037
E-mail　yasaibatake2012@gmail.Com

ＮＰＯ法人 カリタス釜石

【目的】カリタス釜石はキリスト教的愛の精神に基づき、東日本大震災によって　被災した人々に寄り添い、自立を促し孤独孤立の防止に努めます。また、女性や子ども等、弱い立場に置かれた人々の人権擁護のための事業に取り組みます。一人ひとりが尊重される優しい社会を目指し、新しい釜石の「街づくり」に貢献します。（定款第２章第３条目的）

【会員の種類】・正会員：この法人の目的に賛同して入会した個人及び団体(総会での議決権があります)**・賛助会員**：この法人の事業を賛助するために入会した個人及び団体(賛助会員は財政的にご支援頂ける方で総会での議決権は、ありません。)

入会金・年会費、会員お申込方法等は、ホームページを　ご覧いただくか、下記までお問い**合わせください。**

【お問い合わせ先】

特定非営利活動法人カリタス釜石事務局
〒026-0022　岩手県釜石市大只越町 2-4-4
電話/FAX　0193-27-9030
E-mail　kamaishi311@gmail.Com
ホームページ http://www.Caritaskamaishi.Com

カリタス釜石法人認証式

山口神父様(左)とスタッフ

設立記念ミサ

【ボランティア急募】

東日本大震災復興支援に取り組んでいる次の各ベースで、ボランティアを募集しています。

- 札幌カリタス宮古ベース
- カリタス大槌ベース
- カリタス釜石
- カリタス大船渡ベース
- カリタス米川ベース
- カリタス石巻ベース
- CTVC カリタス原町ベース
- いわきサポートステーション「もみの木」。

申込み、問合せは、仙台教区サポートセンターへ。
TEL022 - 797 - 6643

新刊案内

人生と信仰についての覚え書き

著者　岩田靖夫／発行　女子パウロ会／定価　１３００円＋税

現在、仙台で活躍なさっている哲学者として著名な岩田靖夫先生が、約10年間、主に仙台白百合女子大学で行われた講話や講演の中から、人生、信仰についての省察を著者自身が集め、加筆なさったものです。

有名な哲学者というと、「難しい言葉遣いの文章」に違いないと敬遠されがちですが、初めてキリスト教の話を聞く女子大生に、やさしく語りかけたもので、わかりやすい内容と、日本人の宗教観にピタッとくるものです。

全体は４章に分かれており、第１章では、よく生きる大原則は、感謝する、自己として生きる、愛する、の３つで、それを「ありがとう」「こんにちは」「ご大切」という言葉を使って説明。第２章は、イエスの言行とたとえ話が取り上げられ、イエスの慈しみ深さが浮き彫りにされています。第３章と第４章では、旧約聖書のヨブ記や、諸宗教の説く言葉を取り上げながら、神を紹介するものです。

災害、死、罪、ゆるし、救い、運命などの根本問題を信仰の心で考え、わかりやすい言葉で語りかけています。